

移民政策研究一筋の道

坂中英徳

坂中論文と共に歩んだ40年

よわいを重ねると坂中論文と共に歩んだ40年の歴史を振り返ることが多くなった。70の年になると自分の歩んだ軌跡が客観的に見れる。

これまで書いた政策論文でも世界観や行動美学を率直に語っている。生き方や政策目標を公にして自らの行動を縛り、逃げ道を断ち、有言実行の道を歩んできた。公明を旨とし、明快に生きることを心がけた。そうすれば孤立無援の状態が続いても、世の中の風向きが変わり、政策実現の可能性が出てくるだろうと考えた。

1975年の坂中論文から40年間で20冊を超える著書を出版した。こういう役人は日本では珍しいのかもしれない。2005年に役人を辞めた後は民間のシンクタンク、移民政策研究所を設立。この10年間、人口減少社会の移民政策研究と政策提言に専念した努力が実り、ここに移民国家理論体系の完成を見た。

孤軍奮闘を余儀なくされ、各方面からたたかればなっしの目に遇ったが、国家の浮沈のかかる政策提言文を執筆する機会に恵まれたことに感謝している。

処女作の『今後の出入国管理行政のあり方について』が入管政策論の金字塔と評価されたことで移民政策一筋の人生行路が定まった。一本の政策論文がひとりの日本人の運命を決めることもあるのだ。移民革命が求められる時代と遭遇して日本の歴史を動かすこともあるのだ。

1975年2月、法務省入国管理局が、「今後の出入国管理行政のあり方について」という課題で職員から論文を募集した。この年、出入国管理行政発足25周年を迎えるのを記念して行われた行事の一環だった。

この論文募集に若輩の私も応募した。そして、審査の結果、私の書いた論文が優秀作に選ばれた。記念論文の審査委員長を務めた竹村照雄氏(当時法務省入国管理局次長)の選評が私の手元にある。身に余る評価をいただいた。

〈第一部優秀作の坂中論文は、その視点において、その構想において、その論証において、まことに見事なものであり、「二十五周年記念」とするに全くふさわしい内容というべきであった。審査員全員が一致してこれを優秀作に推したのである。出入国管理行政を世界的な変化発展の中で位置づけ、外国人の人権保障への明確な意識と国益との調和を目指して将来を展望し、しかもいたずらに理想に走ることなく、絶えず足下現実の問題に即し、これに立ち返りつつ議論を進める態度は、その考察の基礎となっている資料の豊富さとともに、力強く迫るものがあった。〉

移民政策三昧の地方局長時代

法務省時代の私は、1997年4月の人事異動で仙台入国管理局長の辞令を受けた。以後、二度と法務本省で勤務することはなかった。

福岡入国管理局長、名古屋入国管理局長、東京入国管理局長のポストを歴任し、2005年3月、法務省を退職した。

8年間の地方局長時代、私は何をやったのか。暇をもてあましていたわけではない。実は、ルーチンワークをこなすかわら、執筆活動に精を出していたのだ。その成果物が、次の6冊の本の出版である。

- ①『出入国管理及び難民認定法逐条解説 新版』（共著、日本加除出版、1997年）
- ②『在日韓国・朝鮮人政策論の展開』（日本加除出版、1999年）
- ③『出入国管理及び難民認定法逐条解説 全訂版』（日本加除出版、2000年）
- ④『日本の外国人政策の構想』（日本加除出版、2001年）
- ⑤『外国人に夢を与える社会を作る——縮小してゆく日本の外国人政策』（日本僑報社、2004年）
- ⑥『入管戦記』（講談社、2005年）

もう一つやったことがある。1997年の夏から、10年以内に訪れる人口減少社会の移民政策のあり方について思索する研究三昧の生活を送った。その努力の結晶である移民国家ビジョンが、前記『入管戦記』（第9章「2050年のユートピア」と、第10章「『小さな日本』と『大きな日本』」）である。

役人時代の晩年は充実したものだった。退職後の飛躍につながる雌伏8年であった。地方入管局長時代、来るべき人口減少時代をにらんで移民政策研究をすすめた結果、「ミスターイミグレーション」と呼ばれる今の自分があるのだと思っている。

移民問題の本質に迫る

以下の引用文は、1975年の坂中論文の「国際間の人口移動」の章の総論部分をまとめたものである。40年前の論文であるが、国際人国移動と移民問題の本質に迫って試行錯誤を重ねた苦心の作である。

その中で、「先進国においては、豊かな社会が形成され、出生率と死亡率がともに低下し、少子高齢化社会を迎えている。そこでは、製造業、重化学工業等の基幹産業やサービス部門における労働力不足の問題が新たに生じている」と、40年後の日本の姿を正確にとらえている。

人口問題の深刻さが増し、移民国家をめぐる議論が本格化する中、この論考が人口減少

問題の解決策としての移民政策を考える場合の参考となれば幸いである。

〈人類の歴史を振り返ると、生存のため、あるいはより良い生活環境を求めて人が新しい土地に移り住む、地球規模での人の移動と定住の歴史であったと見ることができる。今日、人類は多くの民族と国民に別れて世界各地に住んでいるが、これらの民族や国民はすべて、より適した生活条件の土地を目指して移住してきた移民と、その子孫によって形成されたものである。人類は今後も、生活の糧を得るため、あるいは快適な生活を求めて、国内のみならず国境を越えて活発に移動し続けることであろう。〉

国際間の人口移動(移民)についていえば、地球上に人口分布と経済発展の不均衡が存在する限り、人口稠密で労働力過剰の国から人口希薄で労働力不足の国への人の移動は絶えないであろう。地球上に富の偏在が存在する限り、貧しい国から豊かな国への人の移動は不可避であろう。

世界の現状を観察すると、開発途上国における人口爆発と社会経済開発の停滞、先進国における人口革命と経済発展という顕著なコントラストが見られる。開発途上国においては、人口激増と貧困の悪循環が生じている。一方、先進国においては、豊かな社会が形成され、出生率と死亡率がともに低下し、少子高齢化社会を迎えている。そこでは、製造業、重化学工業等の基幹産業やサービス部門における労働力不足の問題が新たに生じている。

他方、移民とその末裔である国民は、いったん地域共同社会(国民社会)を作り上げ、あるいは社会の構成員としての地位が認められると、自分たちの獲得した利益を守ることが第一義的な関心事となる。新たな移民の到来に対しては次第に閉鎖的な態度をとるようになり、ついには門を閉ざしてその移住を防止するに至る。このような入国管理体制は、それぞれの国民(現住者)のなわばり意識(移住希望者の国民共同体への加入を拒否する姿勢)を背景とした一種の縄張り体制と見ることができる。〉

坂中英徳は転向したのか？

わたしは1975年の坂中論文の「我が国の出入国管理の基本政策」の章において、移民の入国を認めないとする政策にくみする立場から、次のように述べた。

〈最近におけるこの政策の実施状況を、我が国における国際間の人口移動の管理の視点からみておこう。国際間の人口移動について、外国人の入・出国者の差と日本人の出・帰国者の差との比較でみたのが表(1)である。外国人の日本移住者数と日本人の外国移住者数との比較でみたのが表(2)である。この二つの表から我々は、外国人移住者の入国と在留

外国人の定着化(移民化)を極力制限する出入国管理政策がとられてきたことが有力な一因となつて、我が国における国際間の人口移動は日本の総人口の変動に対してほとんど影響を与えない程度の僅かなものであったこと、及び海外で生活する日本人が日本で生活する外国人よりも若干多かったことの二点を確認できるであろう。)

〈長期在留外国人(移民)を受け入れないという入国管理の基本政策は、国民生活を守るといふ出入国管理行政の基本理念を踏まえ、並びに、次のような我が国の置かれている現状及び将来における状況等を勘案して総合的に判断した場合、今後とも引き続きとるべき政策であると考えられる。)

移民の入国抑制政策を今後もとるのが相当であると判断する根拠として、①我が国社会の人口収容力はすでに限界状況にあること、②安定経済成長下における雇用情勢は一段ときびしくなること、③日本社会には閉鎖的なところをなお根強く残っており、移民を入国させるべしという国民の声はほとんど聞かれないこと、④移民として外国人を受け入れることにより世界にも稀な単一民族による日本社会の構成が崩れ、比較的安定している我が国の社会秩序が損なわれるおそれがあることの四点を挙げている。

行政官時代は移民規制の急先鋒であったが、退官後は「美しい衰退の道」の立場をひるがえし、人口崩壊時代の日本の存続を図る立場から「移民50年間1000万人構想」を提案している。「坂中英徳は転向した」という批判は甘んじて受ける。

坂中論文は永遠

私がどうして人口減少時代の新しい国の形としての移民国家の理念型を打ち立てることができたのか。その答えは40年前の論文:『今後の出入国管理行政のあり方について』(坂中論文)にまでさかのぼる。

坂中論文において「国際間の人口移動」の章を立て、人口動態・経済発展・国際人口移動と出入国管理行政は相互に密接に関連するとの問題意識から、「我が国の出入国管理の基本政策」「開発途上国から先進国への人口移動」および「不法な国際間の人口移動」について考察した。

その中で、人口と移民と国際人口移動の関係をつらぬく法則の究明に努め、「一国の人口変動は出生、死亡及び移住の三つの要因によって生じる」、「ここで問題とする国際間の人口移動とは、一般に『移民』といわれているものすなわち外国に永住するための人口移動と、外国に職を求めて定住するための人口移動である」との基本認識に達した。

1975年当時の私は、移民の入国を認めないとする入国管理の基本政策について、日本の人口動向などを考慮して総合的に判断すると、今後も引き続きとるべき政策であると

考えていた。その理由は次のとおりである。

〈日本人口は、将来的には安定化の方向にあり、静止人口の可能性はあるとはいえ、それでもなお、21世紀初頭までに3000万人近くも増加すると推定されている。現在でも異常な高密度社会の日本において、この3000万人の人口増の圧力は他の諸国とは比較にならない重大な意味を持つものであり、これによって過密状況がいつそう進み、日本社会全般に計り知れない悪影響が及ぶことは否定できないだろう。〉

〈一国の人口変動は出生、死亡及び移住の三つの要因によって生じるが、現在すでに超高密度国である我が国の人口が近い将来にわたって出生が死亡を上回る自然増加の傾向にあることがはっきりしている以上、日本の入国管理政策はこれからますます深刻の度を加える人口問題をこれ以上悪化させないという基本方針に沿ったものでなければならない。〉

日本の入国管理政策は、明治の開国から一貫して、人口過剰を理由に、日本永住を希望する外国人の入国拒否すなわち移民拒否の方針が厳格に守られてきた。

2005年は日本の歴史的転換の年であった。その年をピークに、日本の経済と社会を支えてきた人口が減少局面に入ったのだ。政府の将来人口統計は、50年後の人口は今の3分の2に落ち込み、100年後は4000万人台の人口にまで激減すると推定している。

坂中論文から40年がたった今日、日本の人口構造が増加から減少へ百八十度転換したことを受けて、私は「移民拒否」から「移民歓迎」へと考えを改めた。日本が移民の入国を認めないとする政策の根拠が崩れたからだ。むしろ人口減少社会における移民政策の不可避性を強調すべきだと思った。

このコペルニクス的転回は坂中論文の論理的帰結である。元来、人口動態と移民政策の関係を重視する坂中論文は人口崩壊時代にも十分通用する理論なのだ。少子高齢化社会も視野に入れた射程距離の長い論文である。

1975年の坂中論文の時代から人口と移民の関係について深く考えていたので、日本が人口減少期に入るとすぐに、「人口が激減する日本は空前の数の移民を入れる必要がある」という考えが浮かんだ。そのアイデアがふくらみ、人口問題の究極の解決策としての移民国家創成論に発展した。

坂中論文は未曾有の人口危機に遭遇して奇跡的によみがえったというべきである。日本を移民国家に変える原動力となった論文として永遠に読み継がれる可能性が出てきた。

日本型移民国家大綱試案の完成

作家、学者、ジャーナリストなど文章を書くことをなりわいとする人は多い。彼らはプロの文筆家だ。

私は多くの論文、著書をものしたが、元来はアマチュアの物書きである。文章の修行などはしていない。移民政策を提起する必要性に迫られ、我流で文章を書いてきた。「はじめに政策ありき」で書いた政策論文が大半を占める。

入管時代、本業に専念しながら、ひまを盗んで、本来の職務の延長線上の仕事として移民政策をあれこれ考えるのを日課としていた。

深夜の時間帯に、『今後の出入国管理行政のあり方について』（1975年）を嚆矢とし、『在日韓国・朝鮮人政策論の展開』（1999年）、『日本の外国人政策の構想』（2001年）、『入管戦記』（2005年）などの著作に結実する、移民政策関連の論文を絶え間なく書き続けた。

およそ政策提言への挑戦は、当面する問題の本質を正確に認識し、核心をつく政策理論を構築しなければ、すぐに馬脚が現れ、世間の物笑いの種になる。それが的を射た政策提言であったかどうかは、そのうち事実によって証明される。したがって、政策論文を書く野心のある人には、ぬきんでた認識力と構想力と先見の明がそなわっていなければならない。もう一ついえば、特に政治家と行政官には、紙に書いたことを必ず実行する強靱な意志が求められる。

専門分野がなんであれ、政策の立案と実行が一番むずかしいことに変わりはない。国民から結果責任を問われる。だから利口な政治家や行政官は触らぬ神にたたりなしをきめこんで国家政策に手をつけようとしないのだ。

そこにドンキホーテのような変わり者の坂中英徳が登場し、現役の行政官の身でありながら前記政策論文を発表した。恐れを知らぬにもほどがあるが、いつのまにか政策論文の執筆が習い性となった。2005年に法務省を退職した後は、移民政策研究所を根城に、日本独自の移民国家構想を立てるべく理論的研究に精力的に取り組んだ。

この10年間、移民政策に関する研究実績を積み上げ、『移民国家ニッポン——1000万人の移民が日本を救う』（共著、2007年）、『日本型移民国家の構想』（2009年）、『Towards a Japanese-style Immigration Nation』（2009年）、『日本型移民国家の理念』（2010年）、『日本型移民国家への道』（2011年）、『人口崩壊と移民革命——坂中英徳の移民国家宣言』（2012年）、『増補版 日本型移民国家への道』（2013年）など一連の著作を出版した。

そして、近著の『新版 日本型移民国家への道』（2014年）と英文図書：『Japan as a Nation for Immigrants』（2005年）の刊行によって、坂中英徳の日本型移民国家大綱試案が完成した。それとあわせて、遅咲きながら移民政策研究分野において世界に通用するプロフェッショナルの物書きが誕生した。

移民国家の産みの親

わたしは日本人の中では特異な人種に属すると思うが、各方面から多くの「あだ名」を

いただいた。1975年に書いた『今後の出入国管理行政のあり方について』という論文が「坂中論文」と呼称されたことに始まり、「救世主」「売国奴」「冷酷な官僚」「移民政策の元凶」など数々の通称あるいは異名をつけられた。

それら以外にも、2005年に出た『入管戦記』という本の帯で「反骨の官僚」「ミスター入管」と呼ばれた。

2012年10月の『ジャパントイムズ』は「移民が日本を救う」という表題の記事において「移民革命の先導者」と内外に紹介した。

2014年5月、日本外国特派員協会において講演した際には、同協会の専務理事が「坂中英徳氏は日本の『Mr. Immigration』として知られている」と、外国人ジャーナリストに紹介した。日本のミスターイミグレーションが書いた英語版移民政策論文の決定版が前述の『Japan as a Nation for Immigrants』（2015年5月刊）である。世界の知識人はこれを何と名づけるのだろうか。

物議を醸すような移民政策論文を数多く発表し、その実現に努めた実績がものを言って、多彩な顔を持つ坂中像が形成されたのだろう。

悪名を含む、いくつもの顔を持っていることは私の強みである。これは移民国家への道の先導役を果たすうえで強力な武器になると考えている。たとえば、移民1千万人構想は、「反骨の官僚」といわれた元入管職員の政策提言ということで政府部内で重く受け止められたようだ。日本の知識人の代表である野田一夫先生から、「ミスターイミグレーションの立てた移民政策は説得力がある」との評価をいただいた。

以下は、移民政策が正念場を迎えた私の決意表明である。人口危機に見舞われた日本を救う「救世主」の責任をはたす。「移民革命の先導者」として最前線で闘う。そして、後世の日本人から「移民国家の産みの親」のあざなで呼ばれる人間をみざす。

老いて夢が膨らむ

古希を迎えたのに大きな夢を持って生きている。日本の新しい国づくりである。日本型移民国家の構想を打ち立て、その実現にまい進している。移民国家ビジョンも私の夢の産物である。夢を抱くのは若者の特権というきまりはない。いま私は老いて夢がふくらむ人生をエンジョイしている。

もともと移民国家のアイディアは坂中英徳の頭にひらめいた小さな夢にすぎないものだった。ところが、歴史の必然なのか、時代の要請なのか、日本の命運は私の夢がかなうかどうかにかかることになった。そう、ひとり私の夢で終わらすわけにはいなくなったのだ。何としてもそれを正夢にしなければならなくなった。日本の未来を決定する重責であると自覚している。

夢の実現に向かって不退転の決意で臨む。死を迎える日まで夢を追い求める。私の人生と引きかえに日本を移民国家にする夢が実現すれば文字通りハッピーエンドになる。

大きな夢を描けば大きな花が咲く。夢のない人生は不毛である。夢をはぐくむ人生は実りが期待できる。年をとるにつれて夢がどんどん大きくなってゆく私は至福の人生を送っているのだろう。

いま現在の私が抱いている一番の夢は、移民国家の創建の夢を分かち合って行動を共にする若者が現れることである。

波乱万丈の劇的な一生

法務省入国管理局に勤務していた時代、誰もが触れようとしないう未解決の問題、たとえば、在日韓国・朝鮮人の処遇問題（1975年）、フィリピン人興行入国者の人身売買問題（1995年）、北朝鮮残留日本人妻の帰国問題（2002年）など、出入国管理行政上の難題と取り組んだ。

私の問題提起と政策提言から論争の火蓋が切られた。脅しと批判の集中砲火に見舞われ、問題の解決までに長い期間を要した。

2005年に公務員生活を終えた後は、一般社団法人移民政策研究所の所長として移民政策の立案に専念している。

2014年に入り、私の立てた「移民50年間1千万人構想」が国民的課題に浮上し、排外主義者・国粋主義者・ヘイトスピーチグループなどの坂中打倒の動きが目立つ。移民革命の先導者の役を買って出た以上、彼らの攻撃的になるのは覚悟の上だ。

何回も修羅場をくぐって多くのことを学んだ。脅迫・非難・罵倒が集中するのは正論を吐いた人間の宿命と冷静に受け止める。自分は正しいことをしているのだと自らに言い聞かせて信条を貫く。

運と奇跡が頼りの冒険家のような人生が尋常なものではないことは自分でもわかっている。綱渡りの連続の役人生活をすごした。何とか無事退職できたが、「命があったのが奇跡」と上司から忠告された。妻子からは「お父さんはできもしない無謀なことばかりやってきた」と言われた。

悪戦苦闘が続く職業人生だったが、無人の荒野を一人行くがごとく、やりたいことを思う存分やった。いつも単騎で戦いに挑み、最終的には政策提言の多くが実現した。いろいろなことがあったが、波乱万丈の劇的な一生に満足している。

坂中移民国家論は有終の美を飾れるのか？

わたしは1975年の在日朝鮮人政策の立案をもって移民政策の嚆矢とし、それ以後、40年間、移民政策一本の道を歩んだ。誰もが恐れをなしてさわろうとしなかった移民国家大綱の立案に全精力を傾けた。四面楚歌と一人旅が続く中、自らを叱咤激励して移民国家の根本原理の究明に心血を注いだ。

その間、切れ目なく移民政策論文を書き続けた。移民政策研究の白眉といえるのが、2014年に出た『新版 日本型移民国家への道』（東信堂）である。さらにこの5月、世界の人々が移民国家ジャパンの誕生を歓迎する契機となればと願って、英文の移民政策論文の決定版：『Japan as a Nation for Immigrants』を発行した。すでに坂中移民国家構想は海外で広く知られているので、近未来を視野に入れたこの英文図書は世界の知識人に衝撃を与えると予想している。

最近、親しい英国人ジャーナリストから、「革命的な移民国家構想を公言している坂中さんに官邸からの圧力はないのですか」と尋ねられた。私は「まったく無視される状態に変わりはないが、これまで永田町から坂中構想に対する批判、圧力は一切ない」と答えた。彼は「日本は自由にものが言えるいい国ですね」と述べた。

日本政府は危険な思想家の唱える移民革命思想を敬して遠ざけるといふか、見て見ぬふりをするというか、いずれにしろ政治が坂中移民国家構想に干渉することはなかった。

与野党を問わず日本の政治家は、日本が直面す最大の政治課題＝移民問題について及び腰というか、傍観者の立場に終始した。私の目にはそう写る。政治家はよほど移民が嫌いに見える。無責任政治の極みであるが、革命的な移民政策の立案にとってはそれが幸いした。頭に浮かんだアイデアを誰に遠慮することもなくストレートに表現できた。気がつけば、世界が日本のミスターイミグレーションと認める移民政策研究の第一人者になっていた。

私の使命は移民国家理論の完成で終わらない。移民国家の建国という大業が残っている。新国家建設の偉業を達成すれば坂中移民国家論は有終の美を飾れるが、国事に奔走する者にとってそれは私事だ。大事の前の小事だ。それに、何もかもうまくゆく人生は私の性に合わない。

20代の時分から、いい事づくめの人生などこの世に存在しないという人生観を抱いていた。70になった今も、よい事とそうでない事とが半々で終焉を迎えるのがあるべき人生だと思っている。理路整然とした論文のような人生などあり得ない。仮にあったとしても、そんな完璧な人生は心の葛藤も人間味もない。およそ味気も何もない無味乾燥な人生だ。

画竜点睛を欠く人生に満足である。入管生活では有言実行をモットーに生きてきたが、さすがに移民国家の創成については未完成交響曲で終わるのが当然と考えている。それは三世代の日本人の努力の積み重ねを必要とする世紀の大事業である。

移民国家百年の指針となる理論体系の基礎を築き、八分までの困難の仕事をやりとげたので、将来の国民への責任を果たしたと言い切れる。私の志を引き継ぐ移民革命の志士たちが輩出し、移民国家の金字塔をうち建ててくれると信じており、日本の将来については心配していない。

移民革命の主役は国民

日本人が積極的にそれにかかわらず、歴史の必然や外圧によって移民国家になるということでは将来に禍根を残す。それでは国民が燃えるような精神の高揚を感じることもない。歴史的な仕事に参加したという達成感も得られない。

移民国家の創立という千年に一回の大舞台で主役を演ずるのは国民だ。移民政策について徹底的に議論し、新しい国づくりに主体的に参加し、多民族共同体国家を創るビッグチャンスをも自分のものにしてほしい。

国民の希望と熱意で国を動かし、国の形を変える。同時に、心にしみついた島国根性を改め、博愛の心をはぐくむ。そこから新たな日本文明が始まる。日本国民が主役を務める壮大な歴史ドラマが展開される。

私は全面崩壊の危機にある日本を救いたい一心で、日本人と移民が平和共存する移民国家像を描いた。しかし、それが日本人の心に届いたかどうかについては自信がない。

移民に対する日本人の感情が好転し、日本人が移民と共に生きることに心の底から喜びを感じるようになるまでには長い年月を要するのだろう。

日本人の教養レベルは世界の最高水準にあると言っても過言ではないだろう。八百よろずの神々を信仰する日本人は決して排他的な民族ではない。地球上のどの民族よりも広い心で移民を迎える素養がある。

100年後の日本人は、世界の先頭を切って多民族共同体社会を築いているだろう。100年前にそれを予言した日本人がいたといわれる時代を思い浮かべている。